

日本福音主義神学会

中部部会報第 20 号

<目次>

巻頭言	檀原久由	1P
ディスペンセーション主義の教えとキリスト教 シオニズムの実践に関する分析と評価	安黒 務	3P
超高齢化社会と教会—中部部会・秋季公開講演会	片岡由明	12P
教会の本質をなすディアコニアによる教会形成	相馬伸郎	18P

巻 頭 言

檀原久由

この巻頭言を書いている最中、教会も私も、その中心的な活動を自粛せざるを得ない状況に置かれています。新型コロナウイルスの世界的な蔓延によって、私たちの日常の社会活動が停止し、皆さんの教会でも扉を閉じた状態にあるのではないのでしょうか。

ウイルス感染による死の恐怖や職を失う不安のニュースがあふれています。人と人が親しく接することを禁止するような雰囲気もあります。暗闇が人の心を覆っているかのように思えます。キリスト者でも信仰の揺らぎというものを感じることでしょう。実際、教会でも礼拝や集会の中止によって献金が減少し、教会財政が厳しくなっているという話を耳にします。神はどうしてこのような試練を与えるのだろうかという声も耳にします。そのような現実の中で、主イエスさまの言葉に心を開くことから見えてくるものがあると思うのです。

イエスさまが夕方になって弟子たちに、「向こう岸に渡ろう」と言って、船に乗り込んだ記事が聖書にあります。船を漕ぎだしたところイエスさまは眠りにつき、その後、激しい突風が吹いてきて船が沈みそうになりました。そのとき弟子たちは「先生、私たちは溺れて死んでも、かまわないのですか」と叫んで、イエスさまを起こしたようです。するとイエスさまは起き上がって、「黙れ。静まれ」と言われました。そして「なぜ怖がるのか。まだ信仰がないのか」と弟子たちに言われました（マルコ4章35以下）。

私たちキリスト者も現実の世界と深く結びついて生きているからこそ、疫病の暗黒が作り出す混乱や苦痛や不安と一緒に歩むのです。私は、牧師であっても、その苦しみや不安の共有は当然あるものだと思います。あの船に乗っていた弟子たちのように、私たちキリスト者も目の前で起こる恐怖の出来事に恐れの上を上げるのは当たり前だろうと思います。ただそのところで、不在と思えるような、目には見えない主イエスさまの臨在の確かさを覚えないのです。

箴言3章6に、「どのような道を歩むときにも主を知れ。主はあなたの道筋をまっすぐにごくださる」とあります。災いのある道であっても、幸いのある道であっても、どのような難しい状態の道に置かれたとしても、私たちは主の臨在があることを知るようにと、促されていると思うのです。主による導きの確かさが約束されているからこそ、慌てずに、平安のうちに、主イエスさまの確かな霊の臨在を認めようではありませんか。

私は、牧師としての務めや働きの手を休めている最中ですが、改めて世にあるキリスト者とこの世界との繋がりをこの会報の記事から読み起こそうと願っています。主の業がどのようなことを通してなされるのかをじっくりと考えたいと思います。皆さんもどうぞ時間を取ってお読みください。復活の主として、失意の中にあつた弟子たちに現れたイエスさまは、同じように、弱さを抱えた信仰者の傍にも必ずお出でくださることを、信仰の心で受け止めることができますようにお祈りいたします。

(中部部会理事長)

『ディスペンセーション主義の教えとキリスト教シオニズムの実践に関する分析と評価』

— 福音主義イスラエル論 Part II —

日本福音教会一宮チャペル牧師

一宮基督教研究所主宰者

安黒務

この小冊子は、「ディスペンセーション主義の教えとキリスト教シオニズムの実践に関する分析と評価」と題して開催された、日本福音主義神学会中部部会と東海神学塾との共催の講演会（2019年5月21日）の記録である。そして、その講演はその直後からYouTube・サイトに公開掲載され多くの視聴者を得てきた。講演後、「日本福音主義神学会中部部会報第20号（2020年5月18日発行）に掲載したいので文書にまとめてほしい」との依頼を受け、論稿としてまとめた。ただ文書版は発行部数がきわめて限られているので、広く世界各地の読者に提供するためKindle本（電子版）としても刊行させていただくことにした。

また、この公開にあわせて下記の論稿のひとつがKindle版で刊行されることになった。アマゾン書店の規則で、Kindle版刊行物のPDF公開はできないので、その論稿に関しては、内容梗概のみとし、その詳細はKindle版リンクとさせていただいた。

【目次】

- 前文
- 序

- 1. ディスペンセーション主義の教え[5]—"聖書解釈法・教会論・終末論"の分析
 - (1) 土台：ディスペンセーション主義者と使徒たちの"聖書解釈法"の対照
 - (2) 建物：ディスペンセーション主義者と使徒たちの"教会論"の対照
 - (3) 屋根：ディスペンセーション主義者と使徒たちの"終末論"の対照

- 2. キリスト教シオニズムの実践—"土地・エルサレム・神殿"回復の分析
 - (1) 外円：キリスト教シオニストと使徒たちの"土地"回復の教えの対照[10]
 - (2) 内円：キリスト教シオニストと使徒たちの"エルサレム"回復の教えの対照[12]
 - (3) 中心：キリスト教シオニズムと使徒的"神殿"回復の教えの対照[14]

- 3. ディスペンセーション主義キリスト教シオニズムの誤った解釈例と誤った倫理的実践例
 - (1) ダニエル書9章27節「忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる」の誤った解釈
 - (2) 誤った「聖書解釈と倫理的実践」に関する、ナウム・アティーク[16]による指摘

① 旧約聖書解釈と倫理的実践[17]

② 新約聖書—キリストこそが鍵[19]

③ 新約聖書—使徒たち（また新約著者たち）による「キリストの人格とみわざ」を軸にした旧約再解釈の原理・原則 ※（既述部分と重複するので、詳述は割愛）

●4. 評価—ディスペンセーション主義の教えとキリスト教シオニズムの倫理的実践を「福音主義神学の座標軸」に位置付ける

●結語

●あとがき

●関連する講演・講義ビデオのリンク集

●プロフィール

日本福音主義神学会・中部部会

秋季公開講演会

「超高齢社会と教会」

牧師：片岡由明

少子高齢化が急速に進む日本ですが、「人生 100 年時代」とも言われます。健康で長生きできる社会は歓迎ですが、幼児や子ども達の世代が確実に減少傾向にあります。日本のキリスト教会もその影響を確実に受けています。今回は特に教会に集う高齢者とその関係性について考えます。

「あなたが年をとっても、私は同じようにする。あなたがしらがになっても、私は背負う。私はそうしてきたのだ。なお、私は運ぼう。私は背負って、救い出そう」（イザヤ 46：4）

主なる神は、我々がしらがの高齢者になっても、決して見捨てないで愛を注がれるお方です。その背中に我々を背負い、救済と祝福の道へと運んで下さる。そのあわれみの心は、我々の若い頃から不変です。故に信仰者は、安心して老いを迎える気構えを持てるのです。

高齢期の特長

若い頃、学識・結婚・家族等を獲得して徐々に人間的に成長してきました。しかし高齢になり定年退職・子どもの巣立ち・伴侶の死等で、獲得してきたものを徐々に、かつ一つずつ喪失してゆく事になり、高齢期における悲哀が待ち構えています。

しかし、高齢になっても元気に第一線で活躍している高齢者も多数おられます。聖書のアブラハムやモーセは、高齢になってから主の器に用いられた代表的な人物です。長年の人生経験に裏打ちされた知恵や判断力は秀逸です。新約聖書で高齢のシメオンやアンナは、主キリストの誕生を見届けるという使命を託され、見事に成就しました。故に高齢期は、人生の成熟期・円熟期でもあるのです。

高齢者は健康状態に個人差が拡大するので、個別的な対応が必要でしょう。健康な人とそうでない人の差が顕著になる傾向があります。又、複数の病気や疾患が同居する事も特徴です。高血圧・成人病・高脂血症・認知症予備軍等が、身体に同居する事もあります。

さらに一度疾患にかかると治癒や完治がしにくく、身体的に免疫力・自己治癒能力が低下傾向になります。聴力・視力・味覚等の感覚機能が鈍くなる事もあります。

（老いとそのケア、斎藤友紀雄、p23-）

高齢期の心理的傾向

高齢期になると子どもの独立・収入減少・友人や知人の死別を経験して「うつ傾向」になる可能性があります。以前元気だった人が、何となくふさぎ込みや無関心傾向になり、動作や思考が以前と比べて抑制ぎみになる事もあります。又、「死にたい」と訴えて、食欲不振・便秘・不眠になる事もありますが、そんな時は励ましや叱咤激励はかえって逆効果になります。じっくりと本人の訴えに耳を傾けましょう。

さらにせん妄・妄想傾向になる人もあり、健常者には見えないもの、聞こえないものが認識され、意識障害がでる事も起こります。さらに「空の巣症候群」とは、子どもの独立・結婚によって住み慣れた家庭を離れてゆき、子育て後の目標を見失い、高齢者の生きがいの喪

失を指す言葉です。

高齢者の健康四原則

高齢者が健康で自立生活を維持する為に、日頃心がけたい習慣が4点あると思います。

① 偏らない食事

日々、バランスの取れた食事をとり、特に朝食をぬかない事と、毎日2ℓの水分補給を心がけましょう。

② 適度な運動

「老いは足腰から」と言いますが、日頃の運動を心がけ、散歩やウォーキングで足腰の筋肉を鍛えましょう。

③ 知的作業

手と脳は連動していますので、脳を鍛える為に手作業を心がけましょう。何か新しい事に挑戦したり、習い事にチャレンジしましょう。

④ 人や社会とのコミュニケーション

高齢者の孤独死が問題になっています。日頃、誰とも話さない「ひきこもり」等の社会的孤立化を防ぐ為に、自主的にボランティア活動をしたりして、仲間・友人を増やし自分の「居場所」を見つけましょう。人や社会との繋がりが、健康や自立生活を健全化してくれます。

高齢者と教会

「日本基督教団は著しく高齢化が進んでいる。2008年現在で65才以上の現住陪餐会員約63%と推測される。日本国の高齢化率21.5%と著しく懸け離れている。

逝去に伴う会員の減少とそれに追いつけない受洗者数の低迷、伝道力の低下、余程の伝道をしない限り門戸を閉じざるをえない教会が後を絶たない。これからの10年間にいくつもの教会が消えると推測される。受洗者0が続くまま教会員の高齢化、逝去が続き、やがて礼拝出席者が0になるであろう教会がいくつもあるという」

(老いと生きる、加藤常昭、p50 抜粋)

日本基督教団の現状は他人ごとでなく、自分達の教派でも同様の現象が確実に教会に押し寄せているのを感じます。教会自身が「少子高齢化社会」の縮図となっている事をひしひしと感じます。

高齢者の霊的祝福

教会の礼拝や諸集會に長年にわたって出席されている高齢者の霊的な祝福について、興味深い記事がありましたのでご紹介します。(老いとそのケア、斎藤友紀雄、p75-77 抜粋)

礼拝に毎週出席する人と教会に行かない人とを比較すると、前者の方が長生きすると言われます。それは信徒同士の交流によって、他の仲間から援助を受ける機会が多くなり、困難に直面した時に教会はすぐれて援助的であるからです。例えば祈りをするという行為は、瞑想する面とひたすら願い事を重ねる面もあります。それは、より多くの人達の支援と社会的な資源を呼び込む事にも繋がります。換言すれば、祈りは神に対してだけではなく誰かの援助も呼び込む事になります。祈りは心の緊張を和らげ、血圧や脈拍等を安定させる事にも繋がるのです。

また祈りは、孤独感や社会的孤立を防ぐ役割があります。つまり他者との深い関係性や人生の究極的な意味を悟らせ、人を赦し、自分自身をも受容する事になるからです。祈りのないところでは孤独感や無力感が増大するでしょう。人を赦し、自らをも受け入れる事がきわめて精神の健康に効果があります。

この自己受容が高齢者を含めあらゆる年齢層に対し、うつ病緩和に貢献します。頻繁に教会を訪れ、定期的に祈りをする人は心臓病、高血圧に良い効果をもたらし、自殺率を下げ、結果的に長寿傾向をもたらします。定期的に黙想をする人は、慢性疼痛、不整脈、不眠、うつ、がんやエイズ治療の副作用が減退すると言われます。つまり長く教会生活をされている人は、霊的感情を味わい、医者にかかる回数が減り、医療費節約にもなるのです。

「夕暮れ時に光がある」（ゼカリヤ書 14：6）

教会における高齢者への配慮

教会内での高齢者対応として、転倒防止の為にバリアフリー化が必要でしょう。ちょっとした段差にもつまずいて転倒し、怪我をするリスクが高まります。礼拝場は出来れば一階に作り、スリッパに履き替えなくても土足で入場可能になればと思います。

高齢者が礼拝や集会に参加しやすいように、教会員での奉仕として車での送迎システムを整えたいものです。

週報や印刷物は、なるべく大きな文字で読みやすくしましょう。

説教等を聞きやすくするための、イヤホンの設置や音響設備の充実化も必要になってきます。

高齢者向けのプログラムとして、敬老の日記念会、誕生日会、子どもや若者との交流の場も欲しいです。

また、人生経験豊富な方々のプライドを傷つけぬよう話し方や接し方に配慮が必要です。会話する時、相手が話している途中で口を挟まずに、最後までじっくり聴くという姿勢が大切でしょう。

また、相手がどのような気持ちや感情で話そうとしているかを考慮しながら「絶対傾聴」を心がけましょう。「非言語的コミュニケーション」と言われる目つき、動作、しぐさ等を通して、共に傍に居てくれるという安心感や親近感を与えるように接したいものです。

何よりも、高齢者が社会的に孤立せず、自分の居場所として教会の存在があるという自覚が重要でしょう。

高齢になると足腰が弱くなり、外出や礼拝出席が困難になる傾向があります。そのような時、私達自身がその方の家に出向いて話を聞くという、家庭訪問を心がけたいものです。本人やそのご家族とも親しくなれる良い機会です。

高齢者が生かされる教会 （高齢社会と教会、中道基夫、p51～引用）

教会の中で、将来性と可能性のある「青年伝道」はよく着目されますが、徐々に能力や生産性が衰えてゆく「高齢者伝道」は、関心が薄い様に思います。高齢者は、どうしても「受け身」になり、「主体性・自発性」が希薄になる傾向があります。

しかし今「人生 100 年時代」の中で、高齢期を如何に生きるか、生きがいとは何か、老いや病気や死をどう捉えるか等の議論が教会内でなされる必要があると思います。

ですので、高齢者が長く生きてこれ、そのプロセスの中で、どの様に信仰を歩んで来たのかという「証し」を本や自分史やビデオにして教会の伝道に用いてはどうかと思います。高齢者は何らかのサービスを受ける受け身だけでなく、自ら社会に発信するという自発性と主体性が必要ではないでしょうか。その為には世代を超えて若者も高齢者も共通し、共同で取り組むシステムがあればよいと思います。

例えば、高齢者の証しや戦争の体験談をスマホで撮影し、「YouTube」で流すのです。スマホ操作は若者の得意分野ですから、両者のコラボとタグマッチがここに生まれるわけです。現代的なメディアを使用して青年と高齢者が協力して「世代間伝道」に取り組んではどうでしょう。

エンディングノートの利用

最近では多様なエンディングノートが市販されていますが、それを有効に活用したいものです。エンディングノートは簡易な遺書の役目をします。元気な内に、自分の意思で、どの様に自分の人生に幕を下ろしたいのかを想定して、種々の項目に記入していきます。当教会ではある年齢に達した時点で、本人に説明を加えながら、エンディングノートを記入してもらう事を勧めています。

例えば、延命治療の是非、葬儀内容、好きな讃美歌・聖書箇所、自分自身の略歴、納骨場所とお墓の選択等を記入してもらいます。ご本人が自分の家族と共に同意を得ながら記入すれば、いざという時に家族と教会間でトラブルになる事を未然に防げます。

社会的資源の活用

2000年に発足した「介護保険法」を有効活用して、公的な介護サービスを高齢者の介護に取り入れる事も必要でしょう。自分の住み慣れた地域の中で、自立生活をめざしながら、老後の生活を送りたいとの思いが多くの高齢者の気持ちでしょう。高齢者自身やその家族のニーズに見合った介護サービスを受けられる事がこのシステムの特長です。それにより高齢者を介護する家族の心労の負担軽減化も可能になります。デイサービスやショートステイや家庭訪問サービス等を活用し、自分達の実情に合わせた多様なサービスを選べるという事が可能です。

この社会的資源を有効に利用する為には、各地元にある「地域包括支援センター」にまず相談する事が必要です。そこには、この道のプロフェッショナルがいて種々の適切なアドバイスをしてもらえます。高齢者やその家族の問題で悩み事や困った事を気軽に相談できるので、地域包括支援センターは地元の「駆け込み寺」と言えるでしょう。

教会には、高齢者に対して出来る事と出来ない事の双方があります。教会に出来ない事は、この街の社会的資源を生かし、活用しながらバランスの取れた質の高いケアを実践してゆきたいものです。

福祉カフェへの取り組み

以下は、私自身が高齢者への取り組みという課題の中から得た信仰的な体験とその証しです。

以前読んだ本の中に「福祉カフェ」開設へのチャレンジ記事が掲載されていました。地域に住む高齢者が気軽にお茶を飲みながら、話し合えるような場所を教会が提供しようと言うのです。ウィークデーの会堂は比較的的空いているので、高齢者に解放してはどうでしょうかとの内容でした。(これからの福祉と教会、稲垣久和編、p111)

この記事に啓発されて当教会でも、地域の高齢者が集えるようなカフェを開設しようと願い、祈りつつ準備をしてきました。私も以前、東京在住の頃に「高齢者向けの介護施設」で働いていた経験から、それが生かせる様な伝道・牧会をこの地でもと考えていました。

計画書を書いて小会（役員会）に相談したところ、近隣の同教派教会から何人かの姉妹達がこの件に賛同して下さり、奉仕役を買って出て下さいました。心強い助け手が応援に来て下さると知り、本当に勇気と希望が湧いてくるのを感じました。

しかし最初の頃、全くの素人集団が、どの様にスタートさせればよいか全く分からず「暗中模索」状態でした。それで市内の「社会福祉協議会」に「地域カフェ開設」の為のノウハウを率直に伝授してもらおうと相談に行きました。自分達の志と企画書を持参して、係の職員に相談したところ次の様なアドバイスをもらいました。「そのパッション（情熱）と人材と

場所さえあれば開設は十分に可能です。資格や資金は全く必要ありません。しかし地元の自治会長、組長、老人会の会長、民生委員、地域包括支援センター等、地域で長く高齢者問題に取り組んでおられる方々に必ず挨拶と事前説明に行ってください。地元の方々の理解と賛同を得ずに、勝手に進めてしまうと感情的なしこりが残る可能性があります、うまく前進出来ません」と。

この助言はまさに「目からうろこ」。これで「空を打つような拳闘」を回避できると率直に思いました。暗闇に光が差し込んで来た気がしました。早速、地元の顔役？の方々と、既に「地域カフェ」を開設されている先輩達に挨拶廻りに出掛けました。皆さん好意的に話を受け止めて下さり、懐疑的な感想や異議を唱える方は皆無でした。先に開設されている先輩からは励ましの言葉を頂き、何か胸につかえていた物がストーンと落ちたようで、安堵の胸をなでおろしました。

後に、これがご縁で社会福祉協議会の職員さんや、地域包括支援センターの係の方が当「カフェ」の講師役に来て講演をして下さいました。人的繋がりが徐々に拡大化してゆく様で大変うれしく思いました。

鈴鹿市の福利厚生分野でも「超高齢社会」に対する地元の「高齢者向けボランティア活動」に対して、支援体制が徐々に充実してゆくそういう時期でもありました。市では、我々の様に高齢者向けの「介護予防普及活動」を実施している市民のボランティア団体に「公的な助成金」を支給する制度が始まったのです。早急、この「助成金」を申請したところ、みごとに許可されて支援金が支給されることになりました。毎回の茶菓代、材料費、光熱費、参加者への保険代等に補てんする事が可能となり、経済的に本当に助かりました。教会内で始めた私的で小規模なボランティア活動に対して、鈴鹿市の市政からも公的な励ましと承認を得た事で大いに勇気づけられた事を覚えています。

月に一回、第二月曜日の午後 2:00-4:00 まで会堂を開放して「高齢者向けのカフェ」を開設する事になりました。カフェの名称は「カフェらしく」として、ここに来れば「自分らしく」過ごせるとの意味合いがあります。会堂内の装飾や模様替えをし、リラックスできる空間を演出し、毎回の内容も考えて、飽きが来ないように工夫しようと思っています。開始から既に 4 年目を迎えますが、毎回 10 名程の方々が集ってきます。その中から教会の交わりに導かれる方も少しずつ起こされています。

ボランティア活動を通して

また、新任の牧師は地元住民との繋がりが全くない中で、どの様に地域の方々と人間関係を構築し、かつ拡大化してゆくかが問われます。故に、私は地元でボランティア活動を開始し、その繋がりに人的交流を広めてゆこうと考えました。多くの未信者との関わりの中で、証しが出来たらとの思いです。

これは先の「カフェ開設」とは別の次元で、私個人の純粋な奉仕活動です。早急に先の「社会福祉協議会」に出掛けて、ボランティア活動希望を訴えたところ、二通りの道が開かれました。

最初は、市内の「高齢者福祉施設」で、毎週月曜日の午前中二時間、ご利用者との話し相手、お茶くみ、食事の配膳等の作業です。多くの高齢者は、自分の話を聞いてくれる「耳の人」を切望している事が分かりました。神学校で習った牧会カウンセリングに於ける「傾聴」が生かされる時となりました。

もう一つは、市の社会福祉協議会主催の「有償ボランティア活動・かりん」という奉仕グループの発足に加わりました。市内の高齢者やその家族の要望で、散歩や病院への付き添い、ゴミ出し、話し相手等を有償で引き受けるのです。私は、当初からある高齢者男性と散歩の付き添い活動を毎月一回、日曜日の午後一時間を捻出しています。その方と一時間、近隣周

辺や公園を話をしながら、たっぷりウォーキングするのです。自分自身の健康維持の為の運動にもなり、かつお小遣いも頂けて正に「一石二鳥」です。

この様に赴任当初から市の社会福祉協議会との関係が密になり、何人かの職員との繋がりも出来てきました。ある時、ある職員から私宛に電話がありました。その内容は、市内のあるデイサービスから「心が豊かになる宗教講話の話し手」を捜し求めているとの事でした。私がキリスト教会の牧師をしている事を職員が承知の上で、キリスト教の宗教講話をしてほしいとの無償ボランティアの依頼でした。

そのデイサービスは、寺の住職、神社の神主、キリスト教の牧師や神父等、各宗教団体から講師を招いて、ご利用者の心の糧になる講話を定期的に行っているというのです。私は大いに喜び、二つ返事でこの依頼を引き受けました。多くの未信者の高齢者の前で、何の制限もなく自由に主の福音が語られるという絶好の機会を与えられたのです。年に二回程来てほしいというので、イースターの時期とクリスマスの時期を希望して出掛けました。

最初の日はいースター頃、紙芝居を持参の上でキリストの十字架と復活の話を約40分間する事が出来ました。会場には50～60名程度の高齢者が集っていました。また降誕祭の時は、神学生時代に作った「クリスマス・セロハン影絵」を持参し、スライド映写機で放映しながら、キリスト誕生の意義を話しました。話の後の質疑応答の時も、高齢者達から質問や感想が飛び出て、有意義な時となりました。

この様に自由闊達にデイサービス内で、高齢者向けに福音宣教が出来るとは思いもよりませんでした。まさに、この時、この場は「伝道集会」に様変わりしたのです。神は種々のボランティア活動を通して、主の器として自分を用いて下さる機会を与えて下さった事を心から感謝しました。

数あるデイサービスの中で、各宗教団体から講師を呼んで、ご利用者達に「心が豊かになる宗教講話」を聞かせるという企画を実践しているこの高齢者施設は、本当に稀で貴重だと思います。有意義な経験をしましたが、これも高齢者を意識して、日々触覚を伸ばしている一つの成果と言えるでしょう。

(日本長老教会・鈴鹿キリスト教会牧師)

参考文献

- 「老いとそのケア」 齋藤友紀雄 (キリスト新聞社)
- 「老いを生きる」 加藤常昭 (キリスト新聞社)
- 「高齢社会と教会」 関西学院大学神学部編 (キリスト新聞社)
- 「老いること、死ぬこと」 鍋谷堯爾・森優 (いのちのことば社)
- 「これからの福祉と教会」 稲垣久和編 (いのちのことば社)
- 「人生6合目からの歩み」 日本福音ルーテル教会宣教室発行
- 「人生の秋を生きる」 工藤信夫 (いのちのことば社)

「教会の本質をなすディアコニアによる教会形成」

相馬伸郎

「福音主義神学」第 50 号は、日本の教会にとって極めて重要かつ喫緊の課題とすべき「宣教」を巡る論考が掲載されています。「宣教の神学から考える神学教育一序論的考察一」（篠原基章）と「ミッシヨナル・チャーチを目指して一真正な共同体形成への挑戦一」（杉貴生）そして「福音的宣教の豊かさをディアコニアの視点から再発見する」（ステファン・ファン・デア・ヴァット）です。ひとりでも多くの方に読んで頂きたいと心からお勧め致します。

福音派は、すでに「ローザンヌ誓約」（1974 年）において徹底した自己批判を公にしています。福音の個人主義化、敬虔主義化、救済の個人主義化、教会の自己目的化など、まさに福音派のアイデンティティに楔を打ち込みました。神の国の地平において福音を包括的に捉え直し、その真正な豊かさや広がり教会形成に具現すべきことが明示されたと思います。教会が教会であるためには、伝道とこの世界に対する愛の働き（愛の業・愛の奉仕＝教会の社会的責任と表記）を果たす責任を負わなければならないという方向性です。これは、福音派にとってもはや不可逆な方向性として理解が進んでいるのだと思われまます。（マニラ宣言・ケープタウン決意表明）第 50 号の主題は、まさにその流れの中での議論でありましよう。

さて、この議論は、福音派陣営の外では、すでに 16 世紀の改革者たちから教会のディアコニアという概念で議論が積み重ねられて来たものであると思われまます。私は、福音派においてディアコニア論、ディアコニアの神学がどの程度、議論されているのかについてはほとんど情報を持ち合わせていません。しかし、3・11以降、ディアコニアというギリシャ語を用いて、教会の対外的働き、愛の執事的働きについて議論し、表現する文章が目にとまるようになりました。実は、福音派の社会的責任とは、ディアコニアつまり教会の対外的愛の奉仕と極めて近い概念だろうと考えています。これは、聖書神学の進展の中で「神の国」という鍵の概念をもって旧約、新約の統一性について認識が深められ、常識とされてきつつあることと関連しているのだらうと考えています。

私自身は「宣教」という言葉ではなく「証」という言葉で議論して参りました。教会のありとあらゆる働きは、神の国をこの地上に移す出すこと、つまりキリストとその福音、キリストの王国とその教えを証言することに収斂されます。教会のさまざまな務めは「証」（宣教）に統合されると言っても言い過ぎではないように思われまます。

なお、教会の「働き」という言葉は、本来、「務め」と表現することが、今日の日本の教会の状況において極めて大切と理解して用いています。何故なら、教会は頭であるキリストの職務を地上において代行するための存在だからです。キリストからの委託であれば、教会は決して、自分の好き嫌いや得手不得手等でキリストの務めを自ら取捨選択してすませることはできないと考えるからです。教会は徹底的にキリストのお働きを真似し、これを担う共同体なのです。

そしてその中で、福音派であるか否かを問わず、日本の教会の大きな宿題（課題）があるだらうと思います。それは、教会が地域社会や日本社会の陰に隠れ、権力に睨まれない程度の活動で満足する体質を内に抱えているからです。今こそ、日本社会にインパクトを与える対社会的な働きを担うことができる教会を形成することが大切だらうと思います。そのために、聖書において極めて重要な言葉であるディアコニアを用いることこそ、神学の筋道を整えるために有効であり、また、福音派内外との議論を整えるベースにもなるものと思われま

す。その意味で、ステファン・ファン・デア・ヴァット博士の議論に真剣にむきあって頂ければと心の底からお勧め致します。ちなみに、私どもの教会は、2011年に被災地ディアコニア支援室を組織し、2015年に政治的ディアコニア室を組織して、ディアコニアに生きる教会を標榜して、教会形成の途上にあります。ステファン論文（紀要「改革派神学」所収）は、執事会のテキスト、また上記のテキストは役員と信徒との読書会のテキストにしています。

自由な投稿を求められましたので、下記、2019年の日本キリスト改革派教会中部中会信徒研修会における第一講演の抜粋をお分かり致します。ディアコニアの特別な重要性を強調するために、いささか遠回りの議論ですが、教会の多様な働き（務め）について略述したものです。ディアコニアという概念がまさしく教会の本質をなすものだけに教会形成にとってこれだけ、これ一つに特化、集中して議論することもまた危険です。丁寧に包括的に教会の形成を捉えると共にディアコニアの神学を深めることが今の日本の教会にとって決定的に重要、喫緊の課題と考えます。

なお、聖書からディアコニアを簡単に整理したい方には、拙訳、「聖書におけるディアコニアの全体像」（カルビン神学校新約学教授、マリアーノ・アピラ教授 絶版）がお勧めです。<http://blog.livedoor.jp/iwanoue/>にて公開しています。（岩の上教会で検索 参照）

教会の働き（務め）とディアコニア（自転車のたとえを用いて）

ディアコニアとは聖書の中心主題であり、教会の本質をなす働きです。しかし私は、そこで乱暴な議論をしてはならないと考えています。教会（教団）において「すべては伝道のために」という議論がなされることがあるかもしれません。言わば伝道至上主義は、実に乱暴だと思えます。もし、「ディアコニアによる教会形成」の主張が、それへの対抗として言わば、ディアコニア至上主義となるならこれもまた乱暴で聖書的ではないと思えます。教会の多様な働きの中で、ディアコニアの固有の位置や伝道やその他の働きの固有の位置をきちんと定めることが大切です。ここが整理整頓されていなければ、単なる議論で終わったり、学びで終わったりするだけです。それでは少しも、教会は変わりません。ディアコニアの学びの急所は、私どものあり方が新しくなる、変えられることにこそあります。

教会は、キリストのからだです。体とは動くため、動かすために存在するものです。教会は、主キリストを頭として、洗礼を受けてキリストの体に結ばれた私どもそのものことです。地上の教会は、天に挙げられた王の王であるイエス・キリストを頭にいただき、天上の教会と結ばれています。地上の教会とは、天上のキリストの働きを継承する「運動体」です。キリスト者とは、キリストの手足となって働く器であり、道具です。その動きをディアコニアと呼びます。仕えることであり愛の働きのことです。

キリストの体である教会には多様な働きがあります。同時に、それはただ一人のキリストにおける働きです。したがって、常に有機的な相互関係を持ちます。ですから、ひとりのキリストのご意志をきちんと弁えると同時に、教会の多様な働きそれぞれ固有の意義、固有の目的を弁えることが極めて大切になります。

教会の働きには固有の方向性があると思えます。大きく分ければ、神に向かう方向性と世界に向かう方向性の二つがあると思えます。同時に、教会の内側に向かう方向性と外側に向かう方向性の二つがあります。そして、この四つの働きはすべて有機的な相互関係の中で、神に向かい、教会に向かうと同時に直ちに教会の外に、この世に向かう方向性をもつのです。

これは、いろいろな分け方が可能ですが、今、教会固有の働きとして六つに分類してみま

す。「礼拝」「交わり」そして「教育」「伝道」「証し」そして「奉仕」です。これはまさに私のオリジナルですが、教会とその働きを自転車になぞらえて説明してみたいと思います。もとより、比喩は常に限界があるばかりかむしろ誤解を招く恐れが少なくないことを弁えつつのことです。

よい自転車には、よい車輪が重要です。車輪の中心にある車軸からスポークが四方に伸びて車輪を支えます。車軸から上に伸びる第一の線が【神礼拝（レイトゥルギア）】です。「神の民の祈りの家」と言われるように、礼拝する共同体こそ教会であり、礼拝はまさに教会独自、固有の働きです。また、「教会の生命は礼拝にある」（20周年宣言）と言われるように、教会の働きの生命と力の源です。礼拝は、徹底的に神に向かいます。同時に、教会は礼拝によって自分自身を知ります。そればかりか力を付与されます。天に向かいつつ自らに向かうわけです。同時に、礼拝こそキリストが臨在され、キリストのご支配が貫徹されるときであり、場所ですから、真実の礼拝がなされ、そこに人が招かれるとき、究極の伝道となります。

下へ伸びる線、スポークは、この世に向かう【伝道（ケリュグマ）】です。また【証（マルチュリア）】です。教会は、その誕生も形成も、御言葉の宣べ伝えである【伝道】によってなされます。礼拝は捧げるけれども伝道しない教会があるとすれば、それは既に神の国が地上に完成していると勘違いしている熱狂主義と言わざるを得ません。教会は、世の終わりまで伝道するために神が地上に派遣された共同体です。また、伝道しない教会は死んでいると言われるように、生きている体である教会の動きそのものです。伝道する教会は、伝道の力である聖霊を求めます。つまり、祈りや礼拝への熱心を生みます。伝道する教会は、御言葉の説明をする備えを怠らないゆえに学びへの熱心も生みます。伝道する教会は、傷つき、疲れますから、相互の慰めが必須となり交わりが強くなります。つまり、外に向かいつつ教会の形成も促進されます。

なお、【証】の位置は、実は、難しいです。ここでは、先ず伝道とセットで扱います。教会は、約束の聖霊の注ぎを受けたキリスト復活の証人たちによって出発しました。先達の証しの働き、その連鎖によって教会は今日まで担われて来ました。キリスト復活の証し、神の国の証しこそ、教会の存在理由です。教会と信徒の存在とその働きの究極目標です。車輪は、大地に接する限り前進できます。教会はこの世に「証し」することによって世と出会います。交わりにおいて地面を確実に捉えて前進します。

なお、伝道と証しにははっきりとした相違があります。伝道は、福音の言葉が伴わなければ成り立ちません。相手に届く、届ける神のみ言葉が不可欠です。しかし、証しは、その証言者のあり方、生き方、行動によって神の国を指し示すこともできます。その意味で、実は私は、この証しこそ教会のあらゆる働き、方向性を包括する根本的概念、機能と言ってもよいと考えています。ちなみに、宣教学という学問があります。もし、宣教を伝道より上位におく概念と規定するなら、私の考える証しと宣教とは、置き換えが可能です。

次に、左右にのびる横線、スポークは、人間対人間という水平的な関係を示すものです。教会の内側に向かう線と外側に向かう線が互いに密接に有機的にかかわりあって引かれる線です。たとえば右に伸びるスポークは、【教育（ディダケー）】です。そこに、【交わり（コイノニア）】を加えてみました。

教会は、「御言葉の学校、学びの家」と言われ、「教育あるいは神学」は、教会の生命的形成に不可欠です。働きの担い手である聖徒を奉仕へと訓練するために必須の働きです（エフ

エソ 4:12)。私どもの教会は、教理教育、私の言葉でいえばカテキズム教育を教会形成における生命的に重要なものとして認識し実践してきました。カテキズム教育なくして、教会の正しい働きは始められないからです。

また、キリスト教教育は、常に世界に開かれるべきものです。キリスト教有神的人生観・世界観は、教会の外にむかっても教えられなければなりません。私どもの教会には「教育的伝道」という言葉があります。日本の社会における教会の喜ばしい責務の一つです。これはまたディアコニアとともに、「世界の聖化」つまり神の国の完成を旨とする教会の決定的な武器の一つです。

教会にとって【交わり（コイノニア）】とは、使徒信条の中に「聖徒の交わり」と言われる通り、まさに教会の本質を示すものです。実は、ディアコニアと共に、コイノニアもまた聖書の言葉のなかで多義的で豊かです。たとえば、教会を聖餐共同体と申します。そこで私どもは、主イエス・キリストご自身にあずかります。聖書は、それをコイノニアと言います。こうして、教会員お互いが一つのいのち、神のいのちにあずかり、相互に交わりを持つこともできるのです。さらに、コイノニアには、援助するとか、協力するとかの意味もあります。例えば、エルサレム教会を経済的に援助するその援助はコイノニアという言葉が用いられています。（ロマ 15:26）そうであればコイノニアとディアコニアとが深く結ばれていることが分かるだろうと思います。ディアコニアのはるかな目標は交わりを築くこと、つまり教会形成、神の国の伸展にあります。そして、その具体的な方法でありそこで見えてくる姿こそがコイノニアなのです。そこでは主イエス・キリストの恵みにみんながあずかるのです。

交わりとは、教会を慰めの共同体、「母なる教会」として形成する働きです。会員を励まし、生かす働きを担うものです。70周年の「牧会的共同体」とは、このあたりのことを言っているのだと思います。

確かに教育も交わりも、教会自身に向かいます。しかし同時に、キリスト者の交わりは閉鎖的なものではありませんから、地域社会、世界に広げられるべきものです。教会の働き、教会形成の究極の目標は神の国の進展です。交わりとはまさに地上における神の国のあらわれそのものです。すべての働きが有機的な相互関係の中で、キリストにある交わりをめざし、拡大するわけです。

左に伸びるスポークが、【奉仕（ディアコニア）】です。これは、神と人に仕えること。つまり、上に向かう方向性と下に向かう方向性が含まれています。同時にまた、教会内に向かう方向性と教会外に向かう方向性に分けることができます。その意味からも、ディアコニアは教会の働きの本質的、生命的あり方を規定する概念、用語であります。

日本キリスト改革派教会におけるは、おそらく礼拝を大切にすることにおいては、どの教派、教団にも負けないほどのこだわりを持っていると思います。この路線に間違いはありませんし、何の迷いもありません。日本の少なくない教会が教会であるとはいかなることなのかをきちんと弁えられずに時代の波に翻弄されているだろうと思うからです。ただし、もし私どもの神礼拝に、隣人や世に対する奉仕が伴わないとしたらどうでしょうか。神への奉仕は真実なものと言えなくなるのではないのでしょうか。預言者アモスは「わたしはお前たちの祭りを憎み、退ける」（5:21）と叫びました。もしも、正義を洪水のように、恵みの業を大河のように、尽きることなく流れさせ」（24）ることへと押し出さない礼拝式であれば、昔も今も、真の神礼拝とはならないのではないのでしょうか。ここに教会の対外的ディアコニアの特別の位置と役割があります。

まとめると、教会の使命また存在理由とは、これらの働きを有機的に結び合わせることで、それが回転させるイメージです。教会を、神の国の地上における中心かつ最高のあらわれとして、その交わりの姿を映し出して神の国を証し、神の栄光をあらわして進み行くことです。その意味で、証しこそ、地上の教会の究極の存在目的、究極の存在理由で、いくつもの働きを総合するものです。すべての働きの本質にはディアコニア、神と人に仕え、神と人を愛する愛があります。交わりは教会そのものです。それらは、すべて教育の力によって成し遂げられます。教会の働きの一切の力は上から受ける力と賜物によるものですから、礼拝は教会の生命です。教会は、神への奉仕と人への奉仕、神への愛と人への愛という二つで一つの愛のなかで織りなされ形成されて行くものです。どれ一つも相互に切り離して考えることはできません。

ここからは、自転車全体を教会の歴史や政治、制度と結びあわせて考察してみます。車輪の要となるのは車軸です。主イエス・キリストご自身が車軸、すべての働きの中心です。教会の働きは、主イエスから始まり、主イエスに繋がり、主イエスを中心にして動き出します。だからこそ、教会のさまざまな働きは有機的に一つにつながるものであり、バランスよくなされるべきなのです。そして、教会の働きは、すべてボランティアのようでありボランティアではないということが出来ます。確かに、自発性、主体性、つまり恵みへの応答としての信仰が不可欠です。しかし、それは決して奉仕者の主観性によってなされ、生み出されるものではありません。すべてはキリストからの「委託」に基づいてなされるべきものだからです。キリスト者は、受洗によって、キリスト者つまりディアコノス（愛の業を行う人、執事的働き人、王である僕）として任職された人のことです。キリスト者には誰でも「務め」が与えられています。

自転車を、生き生きとまっすぐに立たせて前進させるためにはよいタイヤが必要です。それが、全信徒でありその奉仕です。その意味では、確かに執事職は重要で、責任は極めて重大です。しかし、教会の働きそのものがディアコノス（神と人に仕える者、愛の働き人）によって担われるディアコニー（僕としての愛の働き）なのです。つまり、全信徒が執事、ディアコノスなのです。彼らこそ、この大地に派遣され、しっかりと大地を踏みしめるべき奉仕者です。

その他の部分についての説明は、時間の関係上、簡略に留めます。確かに一輪車も前に進ませることができます。しかし、ふらつきやすいです。遠い距離を走らせることはできません。一代か二、三世代で倒れてしまわないでしょうか。そもそも、この後輪が教会であるためには前輪が必須なのです。私どもは、決して単立主義の教会ではないのです。前輪とは、世々の教会の働きです。それを「伝統」と言います。各個教会は、この伝統を受け継ぎ、これを正しく生かすところに真実に生起するのです。

前輪の車軸もまたイエスさまご自身です。教会の岩です。同時に、使徒たちもまた教会の土台です。（エフェソ 2:20、「使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身」）教会の揺籃期です。

その輪の外に、いわゆる教会成立の三要件が列記されています。キリストの教会がどこに存在するのか、正統と異端とを何によって識別することができるのか、キリストが臨在する礼拝式、キリストの救いの確かさを保証するものは何か・・・、このような古代教会の神学的闘いの実りとして、キャノン（正典）、クレド（共同信条）、オールド（職務制度）が整備されました。これが4世紀までの歩み。いわゆる公教会（カトリック教会）の成立となります。

その輪の外に 16 世紀の私どもの先達の改革者たちの神学的闘いの実りが記されています。改革・長老教会です。「聖書のみ」「キリストのみ」「恵みのみ」さらに「信仰のみ」「キリストの栄光のみ」。職制としてはすべての全キリスト者の祭司職などが数えられる。この教会の歴史を正しく継承している姿が前輪です。この前輪を自転車にしっかりつなげるフロントフォークが伝統に生きる教会の姿勢です。各個教会は、絶えず伝統から学び続けます。その要となるのが聖書、正典である。そしてその正しい理解（解釈）としての信仰告白こそ伝統の最高の表出。したがって、信仰告白、カテキズム教育が教会の教育の生命線なのです。

この前輪と後輪とをつなぐのがフレームです。私どもにとっては、長老主義政治となります。したがって「中会なくして教会なし」とは、我々のスローガンであり、確信です。創立宣言では、「一つ教会政治」が「公教会（目に見えない教会）」の具現、形成に不可欠であると主張したのはこの経緯のことなのです。「一つ信仰告白」という信仰のいのち溢れる伝統つまり信仰の生命を、今ここに客観的に保証するものが教会職務制度であり、教会政治です。したがって、創立者たちは長老主義政治こそ最善と選択しました。これを教会形成に必須のものとしたのです。ちなみに、「一つ善き生活」とは、地面を踏みしめ回転して進むタイヤ、つまり教会員です。まさに、日本キリスト改革派教会は、一つ信仰告白、一つ教会政治、一つ善き生活の三者をもって、神の国を地上に証して前進すべき教会なのです。

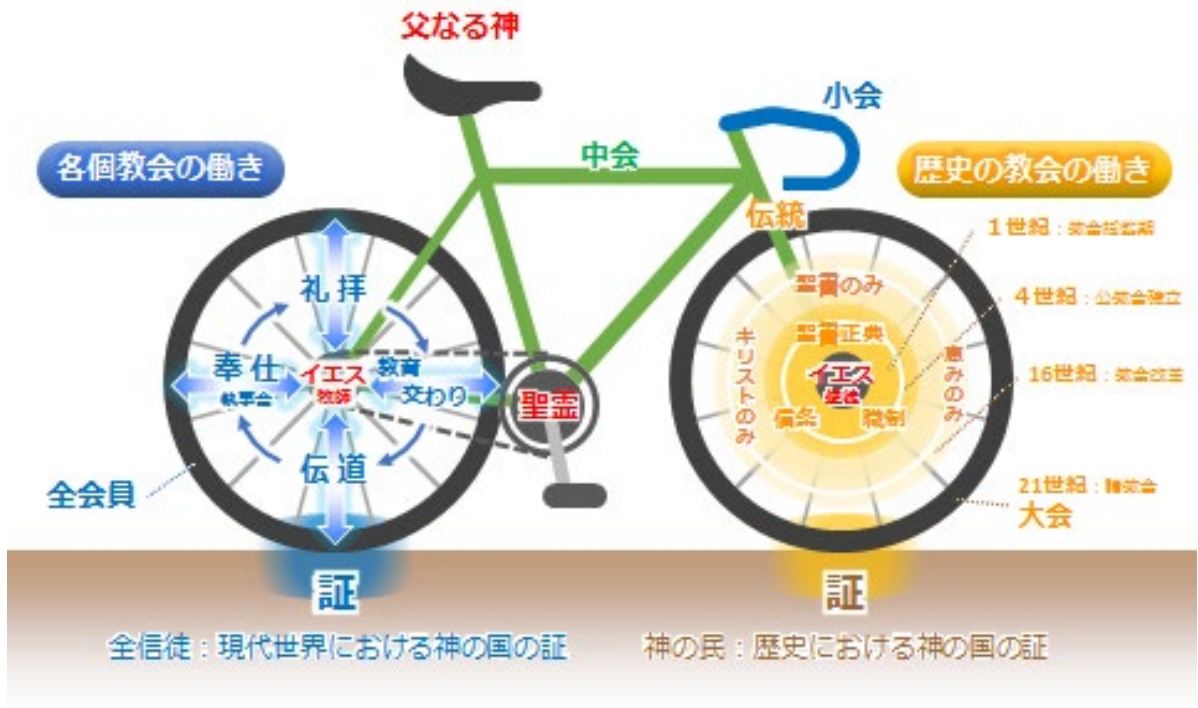
以上、教会の働きのすべては頭であるキリストのお働きと結ばれ、いまここで展開するものです。ですから、頭でいらっしゃるイエスさまとその肢体である私どもひとりひとりがしっかりと結ばれることが要です。同時に、教会のさまざま働き、またその諸制度ともしっかりと結び合わされることが大切です。そのとき、教会の働きは健やかになり、私どもの理想の教会の姿が地上に映し出されて行くはずです。

「ディアコニアによる教会形成」とは、これからは新しくディアコニアを中心に教会形成をしましょうなどということではありません。歴史上、唯一の完全、最高のディアコノス、奉仕者でいらっしゃるイエス・キリストのあり方を身に付けて、これをありとあらゆる教会の働きに生かして参りましょうということだと思えます。また、何よりも、教会におけるディアコニアの固有の価値の大切さをふさわしく取り戻し、実践してまいりましょうということです。

主イエスは、マルコによる福音書第 10 章 45 節においてこのようにご自身の秘密を明かしておられます。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」これは、神の独り子のご本質が人に仕えることにあり、その究極の姿があのかの十字架における贖罪のみわざであることをはっきりと現すものです。さらに言えば、この御子の遜りを命じられるのは御父です。そして御子の御業を支え、完遂せしめたのは聖霊でいらっしゃいます。つまり、父と子と聖霊なる神の存在のあり方そのもの、相互の関係そのものがディアコニアなのです。ですから仕える業、愛の働きは、教会とキリスト者の存在とあり方を規定してしまうものなのです。ディアコニアの本質には神の愛があります。ですからディアコニアは教会の本質をなすのです。ディアコニアによる教会形成とは、働きのすべてに神の愛、仕える精神が貫かれることを目指すものなのです。

Soli Deo Gloria !

(日本キリスト改革派教会 名古屋岩の上教会牧師)



日本福音主義神学会中部部会報第20号

2020年5月18日発行

発行者 檀原久由

編集者 檀原久由

発行所 〒460-0022

名古屋市中区金山2-1-3

金山クリスチャンセンター内

日本福音主義神学会中部部会

TEL・FAX 052-321-7516

郵便振替「日本福音主義神学会・中部」

00850-8-84195